

【ヨハネの福音書について】

〈著者〉

- ・マタイ、マルコ、ルカとは異なる独自の視点から書かれた福音書
- ・マタイ、マルコ、ルカは共通する視点から書かれ、内容も重なるので、共観福音書と呼ばれる。
- ・「これらのことを書いた者は、その弟子である。」（ヨハネ21:24）とあり、「その弟子」とは「イエスが愛された弟子」（21:20）を指し、その人物は12弟子のヨハネではないかと考えられている。
- ・しかし「私たちは、彼の証しが真実であることを知っている」（21:24）とあるので、「その弟子以外」の者がこの福音書の執筆に関わっている。
- ・以上より、この福音書の執筆者については確かなことはわからない。「その弟子」が使徒ヨハネであるにしても、彼がこの福音書をすべて執筆したとは考えにくい。

〈執筆年代〉

- ・大多数の写本ではヨハネの福音書が4番目の福音書として置かれている。
- ・アレクサンドリヤのクレメンスの証言によれば、ヨハネが最後の福音書を作成した。
- ・その成立年代は90年代頃と考えられることがある。

〈執筆目的〉

ヨハネ 20:31 これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。

→この福音書の目的は、イエスの歴史的生涯を伝えることよりも、イエスが「神の子キリスト」であり、「イエスの名によっていのちを得る」ことにある。

1 「初めに」

- ・世界の創造に先立つ「初め」のこと。世界の創造の前に、御子は存在していた。その意味での「初め」である。創世記1:1の「はじめに」は世界が造られた最初を意味する。

1 「ことば」

- ・御子が「ことば」であることは、御子の本質的な特質。
- ・「ことば」が発せられると、この世界が生み出された（3節）。
- ・神のことばが放たれると、出来事（創造）が生み出される。
- ・神のことばはただのことばではない。

4 「いのち」

- ・「御子のいのち」は人間を照らす光。闇の中にいる私たちを照らす光。
- ・なぜ御子のいのちが世の暗闇を照らす光なのか？

→ここではその説明はなされないが、御子のいのちは死を克服するからだと言明できる。闇の力は死である。御子のいのちは死を克服する。

6 「神から遣わされた一人の人」

- ・バプテスマのヨハネはイエス・キリストという光を証しするためにきた。

・ヨハネ自身は光ではなく、光がどこにあるかを指し示す人物であった。

10-11 「この方はもともとから世におられ…ご自分の民はこの方を受け入れなかった」

・創造主を認めない人間。

→人間の罪

13 「ただ、神によって生まれたのである。」

・神の子どもたちは、血縁だとか（つまりユダヤ人であるとか）、人間の望むところ（人間による判断）によるのでもなく、また、人間の意志にもよらず、神によって生まれたのである。

14 「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」

・直訳「ことばは肉となった」

・御子はもともとは肉をもたなかった。

・人間を救うために肉をとられ、私たちの間に住まわれた。

18 「父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」

・御子は父なる神を説き明かされた伝道者。

・なぜなら、御子は父なる神のもとから来られたひとり子だから。

・したがって、父なる神を精確に知るには御子の語ることなくしてはあり得ない。

・そして、御子の語られたことを真の意味で知るには、聖霊の助けが不可欠である。

現存する最初の日本語聖書（カール・ギュツラフ訳）1836年

1 ハジマリニ カシコイモノゴザル、コノカシコイモノ ゴクラクトモノゴザル、コノカシコイモノワ
ゴクラク。

2 ハジマリニ コノカシコイモノ ゴクラクトモノゴザル。

3 ヒトワコトゴトク ミナツクル、ヒトツモ、シゴトハツクラヌ、ヒトハツクラヌナラバ。

4 ヒトノナカニイノチアル、コノイノチワニンゲンノヒカリ、

5 コノヒカリハ クラサニカ、ヤク、タ、シワセカイノクライ ニンゲンワ カンベンシラナンダ。